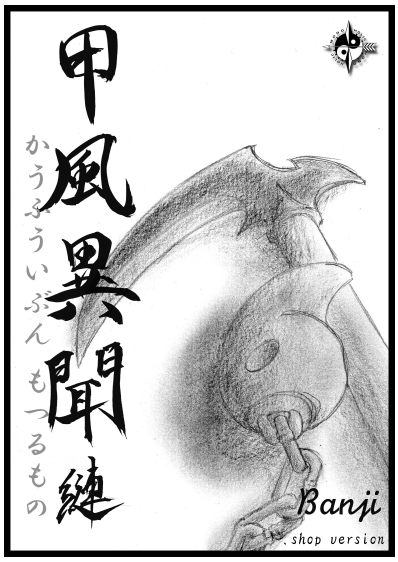
立ち読み版

「甲風異聞 縺」のサンプルです。

第一章「止之巻 その烏、嵐を飛ぶ」の二ページ分を試し読み頂けます。
本編では過激な内容が含まれるためサンプルではご覧頂けません。

本編は.shop by Ground Top、もしくは委託販売先にて販売しております。



「甲風異聞 縺」

定価 七〇〇円＋税

二十禁小説（R20）

.shop by Ground Top
http://groundtop.sakura.ne.jp/shop/
委託販売先で販売中。

止之巻　その烏、嵐を飛ぶ

　重智（しのさと）は、嵐烏（あからす）について何も知らない。普段から近くに居る親友でありながら、実を言うと嵐烏の本名も知らないし、生まれた所も、大げさに言えば過去も知らない。今まで特別に興味を持っていた訳ではないが、毎日甲風屋敷の中で目が回る程忙しそうに家事をこなしているのを見ていると、少しは興味が沸いてくる訳だ。
「嵐ってさぁ。」
　縁側で仰向けに寛ぐ嵐烏を見て、重智が切り出した。
「あん？」
　重智の問いかけに首を仰け反る。逆さの重智、天井。
「何で甲風に来たの？韓に聞いたら、自分から入門したっていうけど。」
「ん〜。」
　重智に引っ掛かったのか、上体を起こす嵐烏。朝早くから掃除、洗濯、炊事と動いて来たのに、一向に疲れている気もない。
「そうだなぁ、自分から来た。重が忍になる四月くらい前かな。」
「俺、いつも嵐の傍に居んのに、嵐のこと何も知らないんだ。」
「だって話したことねぇもん。」
　あからさまに答えてお茶を啜る。「うん」と粗相の無い返事をする重智。日が傾いて、縁側には斜陽がゆっくりと歩いていた。ほっこりと温かい日差し。そう言えば、嵐烏はこの時間になるといつもここにいる気がする。
「で、俺の何が知りたい訳？」
「え？・・・何か、うん、全部。」
「はあ？」
　嵐烏も重智が初めて自分の過去に興味を持ち始めた事は分かっていた。重智の言動には嵐烏も苦笑いだ。
「俺は、昔お袋を殺された。町で武士にぶつかって斬り捨て御免だった。あん時は・・・ぶっ倒れたお袋を見て何も出来なかったなぁ。泣いて家に帰ったんだ。馬鹿だよな、今だったらその武士の一人や二人、獄門覚悟でぶった切ってやんのに。」
　笑いながら話す嵐烏。内心では辛い思い出なのだと、重智はよく分かる。嵐烏はいつも悲しい顔なんて見せた事が無いから。過去を話さないのもきっと、辛いのを隠すのが嫌なのだろう。
「それからは親父が育ててくれたんだけどな、そんな親父の助けになったらと思って甲風の門を叩いた。親父は反対してたんだけどよ、今考えてみりゃ無理言っちまったかもしんねぇな。」
「今、親父さんは？」
「俺が入って直ぐに死んじまったよ。流行ってた疫病で。」
　嵐烏から「食う？」と差し出された団子を受け取る。
「やたらお前らの世話焼いてんのも、その見返りかもしんねぇな。任務から無事に帰って来てくれたら、それだけでいい。だからせめてお前らには楽させてやりたいのかも。」
「嵐。」
　不意に抱きつかれて体勢を崩された。
「どうしたんだよ重！」
「嵐・・・ありがとお。」
　重智が胸元で呟くと、嵐烏の表情が緩む。ぐずる重智をそっと抱き返した。
「暑い。」

「俺さぁ、嵐にいつも迷惑ばかりだ・・・。」
　照れ笑いで誤摩化しながら、涙を拭う重智。
「朝は特に。」
「俺、嵐がいてくれたから起きれるんだよね。」
「あ？あぁ・・・。」
「嵐の日課を奪っちゃ駄目なんだって解った。明日からも頑張って寝坊するから！」
　どたばたと走り去っていく重智の背中を見ながら、嵐烏の思考は少しばかり止まった。
「・・・え？何だそれ！」
　茶を膝に乗せながら、猫背がちに溜め息を吐く。
「何とかなりませんかね、重の寝坊癖。」
　肩越しに奥間に呟くと影から天東（そらぬし）が腕組みをしながら歩いて来た。
　少し長めに伸ばした髪を手で撫でると、縁側の外を眺める。
「結構真剣に隠れていた心算だったんだがな。まあ、お前くらい乱暴にやってくれんと重智は起きんよ。」
「仮にも重の親でしょ。かといって盗み聞きは趣味悪いですけど。」
「お前はどうだ嵐烏。重智を起こすのが日課ではないのか、実は楽しんでいる気もしないではないが？」
「まあ、大方そういうことかもしれないですけど。」
「お前ほどの優秀を、上級とはいえ下忍に置いておくのも勿体無いのだが・・・まあ、お前が望むなら無理は言わん。」
　それに対して、嵐烏は何も答えなかった。
「俺は命を賭してもこの屋敷を守る覚悟がある。俺に才があるなら、それはあいつらのために使いたいんですよ。」
「お前の十手は万敵を防ぐとも云われるからな。」
「誰がそんなこと。」
「皇方は皆そう言っている。十手をあれまで使いこなせるのは甲風にも伊雷にもお前だけしかいないぞ。」
　苦笑いを浮かべながらお茶を啜る嵐烏。袖口から微かに十手の刃先が覗いた。
「重智とは同じ十五年だが、習得の早さは重智を超えるな。」
「俺は重を親友だと思ってます。重とは比較しないでほしいんですが。」
「そうか。・・・これからも重智の良き友でいてくれ。」
「へぇ、嵐ってそんな強いの。」
「んなこと・・・・え？」
　縁側の下から重智が半顔を覗かせながら疑い深い表情を浮かべている。どうやら、盗み聴きは天東より重智の方が上手のようだ。
　天東も気付いていなかったようで、嵐烏は頭を抱えた。
「重智、いつからそこに。」
「頭首が話し始めた時からです。」
「・・・」
　言葉を探すのに戸惑う嵐烏。
「嵐が強いなんて信じられないなぁ。嵐が戦ってるとこ見た事無いもん。頭首が言うなら若干信じるけど。」
「若干ねぇ。」
「強いぞ、嵐烏は。なんなら手合わせしてみるか？」
「頭首！あちっ！」
　振り向き様にお茶を零す。天東が薄ら笑い、嵐烏の肩を叩くと縁側の奥に去っていった。
「やんの？」

甲風異聞 縺 立ち読み版

著者　Banji
作者　Banji
イラスト　Banji
発行　2008年12月
管理コード　df-228463wbvp-s
著作権　Banji
定価　無償試供品

個人販売元
Banji[banji.jp@gmail.com]

Ground Top, .shop by Ground Top
http://groundtop.sakura.ne.jp

Printed in Tokyo, Japan.
文章及び画像の無断利用は禁止されています。